

日本列島におけるモモの伝来を巡る諸問題 —伝来時期・古植物学・遺存状態の検討—

水ノ江和同^{*1} (Mizunoe Kazutomo)
百原 新^{*3} (Momohara Arata)

工藤雄一郎^{*2} (Kudo Yuichiro)
門叶 冬樹^{*4} (Tokanai Fuyuki)

1. モモが日本列島にいつ伝来したか？

モモは現代では食用や観賞用として好まれるが、神話やおとぎ話の世界ではその神聖性や邪気払拭性が重視された。

モモに関する文献上の最古の記載は、『古事記』(712・和銅12年)における黄泉の国神話である。そして各時代・各地域に伝わる桃太郎伝説は、日本人なら誰もが知るところである。

ところで、遺跡から出土するモモ核は弥生時代中期以降の事例がほとんどで、その大部分が低湿地遺跡である。国立歴史民俗博物館の「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」では、約670遺跡から1200件超の出土時代が記載されている。日本人とも深く長い関わりがあるモモがいつ伝来したかという問題は、考古学や古植物学はもちろん日本の歴史という観点においても重要である。

2. 古代以前のモモの研究史と問題点

(1) 先史・古代のモモ核の形態分類による研究

古代のモモ核が初めて発掘調査で確認された事例は、1929年の奈良県藤原宮跡であった。この頃のモモは外来種説(白井光太郎1929)と在来種説(小清水卓二1936, 直良信夫1942)が併存し、古いものが小さく丸いと考えられていた(図1仮説B)。

戦後、特に1970年代以降に大規模開発に伴う発掘調査が急増する中で、モモ核の出土事例も急増した。1986年に太田三善は、弥生時代前期の出土事例からモモは大陸からの伝来品と考え、後期以降に新たな品種の伝来があり急増を考えた。1981年に寺沢薫・知子も弥生時代前期には伝来して中期以降に日本列島全体に広がるとした(図1仮説A)。

(2) 菜畑遺跡と伊木力遺跡のモモ核の発見

1982年に佐賀県唐津市の菜畑遺跡から縄文時代晩期終末(現弥生時代早期)のモモ核が発掘調査で出土し、1984年には長崎県諫早市の伊木力遺跡から縄文時代前期の核が出土した。いずれも低湿地遺跡の包含層からの出土であるが、朝鮮半島に近く、朝鮮半島との関係性が深まった時期に相当することから、モモは縄文時代前期に伝来したという可能性が高まった(図1仮説D)。

これを受け、1991年に南木陸彦は菜畑遺跡や伊木力遺跡等の事例から、大きなモモ核が縄文時代に存在すること、古墳時代以降にはサイズや形態が多様なモモ核が存在することを指摘した。

(3) 年代測定による再検討

菜畑遺跡と伊木力遺跡のモモ核が出土して以降、「モモの出現は縄文時代」で決着したかに見えた。しかし、日本では年間約8000件の発掘調査が行われているのに縄文時代のモモの出土事例が極めて少なく類例が増えていない。また、最近になって鳥取県鳥取市の本高下ノ谷遺跡(縄文時代晩期～弥生時代前期)や、岡山県岡山市の津島岡大遺跡(縄文時代後期)のモモ核自体の¹⁴C年代測定が行われ、前者は弥生時代後期、後者は平安時代に属することが明らかになり、縄文時代に既にモモが渡来していたのかを再検討することが必要不可欠であった。そこで、筆者らは菜畑遺跡と伊木力遺跡、そしてやはり縄文時代とされる滋賀県米原市の入江内湖遺跡のモモ核自体の¹⁴C年代測定を行うこととした。

3. 分析方法と分析結果

(1) 分析方法

菜畑遺跡、伊木力遺跡、入江内湖遺跡から合計

26 点のモモ核から試料を採取し、山形大学の加速器質量分析装置を用いて ^{14}C 年代測定を実施した。また、3 遺跡のモモ核の大きさと形態の変異についてのデータを得るため、核の大きさを測定し、各個体の写真撮影を行い核の形態の分析を行った。

(2) 分析結果

葉畑遺跡：弥生時代早期（縄文時代晩期）～弥生時代前期の夜臼・板付Ⅰ式期とされる褐色植物層から出土した 6 点の試料は、弥生時代早期とは大きく異なり、紀元後 600～1150 年の年代であった。

伊木力遺跡：縄文時代前期の遺物包含層であるⅦ層から出土したモモ核は、紀元前 335～紀元後 325 年の範囲に収まり、およそ弥生時代中期から後期に相当する年代であった。最下層のⅩ層から出土した試料も弥生時代後期に相当する年代であり、縄文時代前期とは大きく異なる年代であった。

入江内湖遺跡：縄文時代早期～前期の遺物包含層から出土したモモ核の年代は紀元後 205～330 年で、弥生時代後期～古墳時代前期の年代であった。縄文時代後期～弥生時代前期の遺物包含層から出土したモモ核 4 点は紀元後 165～540 年であり、弥生時代後期～古墳時代中期に相当する年代で、いずれも縄文時代のモモとは言えない結果であった。

4. 考察

(1) モモ核の形態的特徴の変遷

今回、縄文時代に属するとされていた 3 遺跡のモモ核の年代測定を行ったところ、いずれも弥生時代中期以降に属することが明らかになった。このことから、南木や金原正明（1996）が指摘するように、古いモモ核は小さく新しいモモ核が大型化するとは確実に言えなくなった。

(2) モモの伝来時期とその背景

現在までのところ、縄文時代とされたモモはいずれも後世の混入であることが分かった。また弥生時代早期・前期に相当するモモも確認できていない。するとモモの伝来は弥生時代中期以降ということになる。

近年、弥生時代前期末葉から中期初頭における九州北部での画期が注目されている。それは、圧倒的多数の副葬品（武器形青銅器・鏡・ヒスイ製装身具・貝製腕輪等）を有する墳墓群の出現、大型掘立柱建物を含む巨大集落の出現、朝鮮半島から九州北部へ

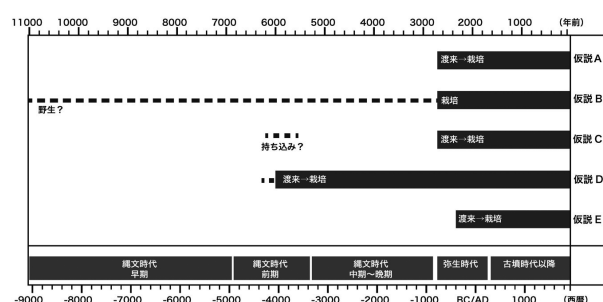


図1 日本列島のモモの伝来に関する5つの仮説

仮説 A：弥生時代開始期の稲作文化と共に朝鮮半島から伝来し栽培されたと考えられる古くからある説

仮説 B：モモの野生種が日本列島にも存在した可能性を考える仮説

仮説 C：縄文時代前期ごろにモモが伝来した可能性を考えるが、散発的な交流からごく限られた一時期にモモが持ち込まれたと考える仮説

仮説 D：縄文時代前期にはモモが伝来し、それ以降の縄文時代を通じて栽培が行われていたとみる仮説（従来最も有力だった仮説）

仮説 E：モモの伝来と栽培の始まりは、縄文時代でも弥生時代早期でもなく、弥生時代前期末～中期初頭に朝鮮半島との交流が活発になった段階とみる仮説（本研究）

青銅器の製作技術を有する人の渡来等である。これらは、その後の日本列島の歴史と文化を形作る社会構造のはじまりとも言え、極めて大きな画期であったと考えられている。すなわち、モモ核の伝来は単独の出来事ではなく、こういった弥生時代前期末葉から中期初頭の大きな画期の中で行われた朝鮮半島との交流の1つの構成要素であったと考えることができるのである（図1の仮説E）。

(3) 低湿地遺跡での遺物の移動問題について

今回の研究でもう1つ注目すべきことがある。これまで単独の年代の包含層から出土した遺物は、すべて単独の年代と考えてきた。しかし、低湿地遺跡の場合、植物の根の発達と腐食、小動物や昆虫の移動等が原因で、遺物の移動が想像以上に多いと考えられる。特に軽くて形態が丸くて小さい種実等は注意が必要である。今後は低湿地遺跡から出土する種実をはじめとした植物遺存体については、極力直接的な年代測定が求められる。

本研究は2024年10月に『日本考古学』第59号（日本考古学協会、pp.1-20）に掲載された同名の論文による。詳細については同論文を参照されたい。

（*1 同志社大学文学部、*2 学習院女子大学国際文化交流学部、*3 千葉大学大学院園芸学研究院、*4 山形大学高感度加速器質量分析センター）